

地域に理解され、都市で成り立つ酪農

～東京23区内唯一の牧場、小泉牧場～

調査研究部 阿部山 徹

1 はじめに

明治時代初期、現在の東京23区¹内にも酪農を営む牧場が多く存在した²。やがて現在の23区内の中心部に人口が集中するようになり、明治30年頃から、次第に多くの牧場が23区の中心部からその周辺へ、さらに23区外へと移動していった。そして、平成14年には23区内で酪農を営む牧場は、練馬区³大泉学園町にある小泉牧場⁴だけになってしまった⁵。

この小泉牧場でも、昭和50年代後半から平成のはじめにかけて、地域住民との対立から地域内で孤立し、廃業を考えたときがあったという。しかし、教育・福祉分野を通じ地域住民と関わりを持つようになり、牧場に対する地域住民の理解が進んだことから、経営を継続することができた。今では、練馬区の観光名所ともなり、多くの区民が知る存在となっている。

この度、小泉牧場を経営する小泉與七氏^{よしち}に聞き取り調査を行う機会に恵まれた。本稿で



図1 小泉牧場のある東京都練馬区

は、この聞き取り調査を元に、小泉牧場と地域住民との関わりが時代とともにどのように変化し、酪農経営が都市で受け入れられていったのかを紹介する。

2 小泉牧場の成り立ち

現在の練馬区大泉学園町にある小泉牧場は、與七氏の養父である小泉藤八氏が昭和10年に開業した⁶。

二代目にあたる與七氏は、昭和42年から牧

1 東京23区の前身は、明治11年、当時の東京府にできた15の区である。その後、15の区と周辺地域が合併し現在の23区になったのは、昭和22年のことである。

2 J A共済ビルのある千代田区平河町周辺の紀尾井町や麴町にもかつて牧場は存在した。『江戸・東京の暮らしを支えた動物たち』(p.34)によると、港区29戸、千代田区に14戸など東京の中心部に多くの牧場が存在した。

3 東京都練馬区は、東京23区の北西部に位置する。人口709,412人(平成24年5月1日現在)。東京23区内で一番広い農地面積277.5ha(平成19年3月31日現在)を有する。作付け農産物の多い順は、キャベツ、ブロッコリー、大根、ジャガイモとなっている(練馬区ウェブサイトより)。都市住民と農家の交流が盛んなところである。

4 飼養頭数42頭。内訳、成牛32頭、育成牛10頭(平成24年5月11日現在)。

5 農林水産省「畜産統計」によると、平成23年、東京都内の酪農家は55戸、飼養頭数は、1,870頭、一戸当平均飼養頭数は34頭となっている。

6 昭和一桁代には、現在の東京23区内に親戚関係の小泉牧場がいくつか存在した。藤八氏は大学で獣医学を学び、獣医師となった後、現在の豊島区にあった小泉牧場で修行し、その後独立した。

場で働き始めた。練馬区は、昭和30年から40年にかけて人口が急速に増加し⁷、農地が著しく減少していた。そのため酪農を廃業するものも多くいたが、昭和42年には区内にまだ10戸の牧場があった(図2)。ちなみに、この時代の東京の酪農といえば、まだ搾乳の多くは手絞りで、牧場では多くの牧夫が働いていたという⁸。

3 都市化と地域住民との対立

昭和50年代に入ると小泉牧場を巡る情勢が一変する。さらなる都市化の進行により、かつて家など数えるほどしかなかった小泉牧場のまわりも家で囲まれてしまった。牧場周辺に新たな住民が増えるに連れ、「臭い」「汚い」「牛の鳴き声がうるさい」など牧場に対する苦情が出てきた。

與七氏が養父藤八氏から牧場の経営を継承した昭和56年には下水道が完成した。糞尿を下水道に流せる環境が整い、臭気対策も前進した。しかし、それでも地域住民からの苦情は止まなかった。区役所からも頻繁に苦情対策を求められた。

その当時は、相続税納税猶予制度⁹の適用を受けており、また従業員の雇用を守るといった経営者の立場からも、酪農経営をやめるといった選択肢はなかった。郊外や山間地等へ移転し、経営を大規模化することも考えられた

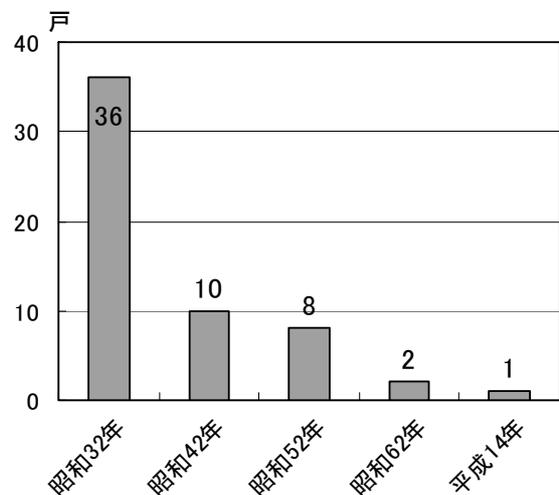


図2 練馬区内の酪農家数の推移

(出典) 小泉牧場発表資料より

ものの、そのノウハウもなく都市酪農の経験しかないことから、先代から引継いだこの場所で酪農を続けていくことを選んだ。與七は、都市化の進んでいるこの土地で生きていくために、まめに糞尿を掃除する、糞尿の臭いが少なくなるように飼料の工夫をする、糞尿等を人目のつかないところに置くなどの臭気対策を行った。

しかし、それでも地域からの苦情も減らず、次第に小泉牧場は地域内で孤立した存在になっていった。昭和52年に8戸あった練馬区の酪農家は、昭和62年には小泉牧場と親戚(藤八氏の弟)が営む牧場の2戸にまで減少していた(図2)。

7 昭和30年の練馬区の人口は173,950人、昭和40年には407,033人となり、10年間で約2.3倍になった。昭和30年の農家数は2,350件、昭和40年は1,798件となり、10年間で約0.77倍になった。昭和30年の経営耕地面積は1,866ha、昭和40年は1,215haとなり、10年間で約0.65倍になった(統計資料は練馬区ウェブサイトより。倍率は筆者が算出)。

8 酪農業界は、昭和40年前後から、次第に搾乳機や、パイプライン、冷却機などの機械化が進み始め、経営の大規模化と人手のかからない産業構造へと変化していった。また、保存技術の発達により長距離の輸送にも耐えられるようになり、牛乳は次第に都市郊外での生産が多くなった。

9 相続人が、農業を営んでいた被相続人から農地等を相続し、農業を継続する場合、次の相続が農業経営者に対する生前一括贈与があるまでの間、納税が猶予される制度。練馬区は市街化区域内にあるので、納税猶予が適用されるためには、昭和50年から平成3年までに申請した場合は20年営農の継続、それ以降は生産緑地内で終身営農することが必要。

4 教育・福祉を通じて地域との新たな関わりが始まる

1) 小学生の牧場見学

同業者が減り、地域からも孤立していた小泉牧場に転機が訪れたのは、昭和60年のことであった。区内にある国立東京学芸大学付属大泉小学校の5年生の社会科見学を受け入れたことから流れが変わってくる。

当時の小泉牧場は地域で孤立し、與七氏としても小学生の社会科見学を受け入れている精神的な余裕はなかったものの、何度断ってもお願いに訪れる教師の熱意に負けて、見学を許可することにした。

見学当日、子どもたちの姿を見て與七氏は驚いた。皆、長靴をはいて牧場にやってきたのである。教師が子どもたちに牧場に行く時の心構えや酪農の知識を教え、子どもたちもよく勉強していることがすぐに分かった。その後も子どもたちは4、5回牧場を訪れ、様々な作業を体験した。後日、與七氏は小学校の牧場体験の発表会に招待され、子どもたちから心のこもった感想文を受け取った¹⁰。

これまで地域住民との対応で色々と苦悩していた與七氏であったが、教育熱心な教師と勉強熱心な子どもたちと接したことによって、地域で孤立していた状況を脱していった。

やがて、その小学校との関係は担当の教師の異動により途絶えてしまったが、どこからか噂を聞きつけた他小学校の図工の先生が子どもたちと一緒に牧場で牛の絵を書きたいと訪れてきたり、子どもたちや親が頻繁に牧場



小泉牧場の風景

見学にやってくるようになった。

見学時、子どもたちから受ける質問は、與七氏を困らせた。例えば、「子牛は何歳までの牛のことを言うの?」といった質問である。酪農家でありながら子どもたちの素朴な疑問に答えられないこともしばしばあり、與七氏は「さすがにこれではまずい」と思ったという。改めて酪農の基本について勉強をやり直すとともに、子どもに分かりやすく伝えるには、どうすればよいのかを真剣に考えるようになった。

2) 福祉への協力

平成5年より牧場から一番近い区立大泉小学校の情緒障害学級の児童の見学を受け入れ始めた。また、平成12年には東京都の社会適応訓練事業の受け入れ農場として、精神疾患患者を受け入れた。このような取組みは、単発のものが多かった。しかし、教育・福祉の場として地域との関わりが増えたことによって、かつて苦情ばかり言われていた区役所との関係も次第に改善した。また、子どもたち

10 その授業は、「畜産の盛んな地域」と題して、北海道の牧場と東京の牧場を比較するものであった。このときの発表内容は、(社)中央酪農会議ウェブサイト (<http://www.dairy.co.jp/edf/jirei2010/kulbvq0000005uj4-att/vol1052.pdf>) で閲覧可能である(平成24年5月17日現在)。

が親と一緒に、牧場を訪れている後ろ姿を地域住民が見ることによって、地域からの苦情も減少していったという。

3) 後継者の誕生と搾乳の機械化

平成2年には、スイスの牧場で研修を終えた息子の勝氏が帰国した。小泉牧場の三代目として就農し、牧場の後継者問題も解決した。長年牧場で働いていた牧夫も引退の時期を迎えていたので、それまで全て手絞りでやってきた搾乳作業を完全に機械化した。さらに一部の牛舎を畳んで、與七氏と勝氏の親子二人でできる頭数（約40頭）に経営規模を縮小し、現在の経営に近い形が出来上がった。

5 「総合的な学習の時間」により地域との関係基盤ができる

地域との関わりができてきた小泉牧場に最大の転機が訪れたのは平成13年のことである。情緒障害学級の児童の見学を受け入れていた区立大泉小学校から、3年生の「総合的な学習の時間¹¹」（以下、総合学習という）に、「小泉牧場探検」を行いたいと連絡を受けた。その発端は、区のウォークラリーに牧場が協力した時に子どもたちが牧場を訪れていたことだった。子どもたちからの提案を教師が受け止め、「小泉牧場探検」は実現したのである。

その当時、與七氏は、教育や福祉の分野と関わりを持ち地域との関係をそれなりに築いていた。だが、今後については、「牧場をこれまで以上に地域に開かれたものにしなければ地域で生き残れなくなる」と考えはじめていた時期であった。仕事の休み時間中に来られるなら、という条件で小学校からの申し出を

受け入れた。小学校とも何度も相談することで授業を進めていくことにした。

総合学習も始まったばかりであり、担任の教師も非常に熱心であった。平成13年に牧場を訪れた小学3年生は、年に約20回も牧場を訪れた。クラスでグループを作り研究テーマを決め、牧場体験をしながら、「牛乳はどうやってできるのか」「糞尿はなぜ臭いのか」「牛の胃袋はどうなっているのか」など酪農に関することを学んでいった。

次第に授業とは関係なく、放課後や休みの日に牧場を訪れる子どもたちも現れてきた。中には、子牛の出産があれば時間を問わず牧場に見学にくるものもいた。食や動物の命について学ぶことのできる牧場は、子どもたちにとって食育を学ぶ絶好の場となった。

多くの子どもたちが訪れることになったため、牧場側も足場を整え、地域から見えやすいように草を刈るなど見学環境を整えた。

このような小泉牧場での活動は、子どもを通じて地域の大人たちに伝わった。そして、地域住民の小泉牧場を見る目も変わってきた。その活動は、新聞でも大きく報道された。この大泉小学校との総合学習活動が、現在の牧場体験活動の基礎を築いた。

6 地域内外との関わりが広まる

大泉小学校の3年生は、平成13年以降現在まで、年間を通して総合学習で小泉牧場を訪れている。また、他の小学校でも牧場で体験を行う機会が増えてきた。学習の最後には、発表会なども行われている。與七氏は毎年招待され、牧場での体験で何を学んでくれたのか聞くのを楽しみにしている。

11 「総合的な学習の時間は、変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらい」（文部科学省ウェブサイト）とし、平成12年に始まった。小学校では3～6年生に授業がある。平成24年の年間授業時間は、70時間（週平均2時間）。

平成14年からは、担当の小学校の教師・栄養士など関係者向けの牧場体験も開始した。

また、その年には、(社)中央酪農会議の「酪農教育ファーム¹²⁾」にも認定された。小泉牧場は酪農教育の場として、全国的に知られることとなった。やがて区役所とも協力的な関係となった。区役所と中央酪農会議の協賛での牧場体験も実現し、約90名が参加した。

平成16年からは、練馬区の単独事業として、小泉牧場と協力して区民向けの牧場体験を開始した。

その他に、幼稚園・保育園、酪農・教育関係の大学生など地域内外問わず可能な限り受け入れた。

7 地域が牧場の応援団

現在、小泉牧場で搾乳された生乳は、「東京牛乳¹³⁾」として消費者に販売されているが、小学校の先生から何か牧場産のオリジナル商品をつくったら売れるのではないかと提案があった。そこで、知り合いのアイス工房で「《搾りたてミルク》小泉牧場アイスミルク¹⁴⁾」を制作し、牧場内で販売を開始した。

アイスミルクは、子どもたちの後押しもあって評判となり、地域で徐々に売れ始めた。地域のお土産として、地方発送する人も現れた。区立大泉小学校では、学校給食で時々行

われる「地産地消の日」の献立にのぼることもある。

また、練馬区観光協会が、このアイスミルクを、「ねりコレ¹⁵⁾」の一品に認定し、ウェブサイト等で広報を行ったことで、アイスミルクを目当てに牧場を訪れる観光客も増えてきた。

そして、「ねりまのねり歩き」という練馬の散歩コースに牧場を組み入れたコースを作った。このようにして小泉牧場は、今では、牛乳の生産牧場としてだけでなく、地域の観光資源としても活用されている。

地域が小泉牧場の価値を認め、牧場の応援団となっている。その活動は、結城(2009)の言う「この土地を楽しく生きるための『あるもの探し』」、つまり「地元学」が都市で実践されている事例としても注目できるだろう。

8 都市住民に酪農経営を理解してもらうために

小泉牧場の地域における活動は、金銭的な利益を直接生んでいるわけではない。しかし、この場所で酪農を続けて行くためには必要なことであると與七氏は考えた。結果として、地域住民が酪農という仕事を理解し、地域住民と良好な関係を築くことができた。このこ

12 「「食といのちの学び」をテーマとして、「酪農体験」「動物とのふれあい」を通して学ぶ教育活動」(中央酪農会議ウェブサイトより)として、平成8年より検討をはじめ、平成13年より本格的にスタートした。平成24年3月末現在で309(うち東京都は8)の牧場が認定されている。

13 東京都酪農協同組合と多摩地区の酪農家及び協同乳業で共同開発した産地指定牛乳。

14 アイスクリーム類は、含まれる乳固形分や乳脂肪分の量等によって、アイスクリーム、アイスミルク、ラクトアイスの3つに分類される。アイスミルクは、乳固成分10.0%以上、内乳脂肪分、3.0%以上のものを言う。小泉牧場では、アイスミルクの生産ができないので、東京都日野市の「百草ファーム」に委託している。1個300円。小泉牧場とJA東京あおばの農産物直売所ファーマーズショップ「こぐれ村」でも販売している。

15 練馬区のイメージの浮かぶ地名や歴史、伝説、風物などを反映した商品。和菓子、洋菓子、工芸品など全87品(平成23年10月1日現在)。

とが苦情の減少や経営の安定にもつながった。さらに行政・業界団体等との結びつきも強くなり、牧場に対する協力の輪が広がった。

與七氏のところには「地域との関係がうまくいかない」と相談に訪れる牧場関係者がいるという。その時は、「経営をオープン（自由に見学したり、地域住民と話ができる環境をつくること）にして、時には自分から地域住民の中に飛び込んでみるのが大切である」と助言している。だが、このような相談に訪れる人に限って、助言に対して戸惑い、何もしない人が多いのが現実だという。「できることからでいいので、何かやってみることが地域との良好な関係をつくるためには重要だ。小泉牧場の事例は何かの参考になるだろう」と與七氏は語る。

9 おわりに

與七氏は、4年前、65歳で牧場経営の第一線から退いた。今は、後継者の勝氏が経営を担い、総合学習や酪農教育ファーム等の中心となって活動している。

現在、與七氏は牧場のそばの小屋で、アイスミルクを販売しながら、オープンファーム¹⁶（見学自由）となっている小泉牧場に毎日のように訪れる子どもたち・地域住民・観光客に必要なあれば、牧場のことを色々と説明する日々を送っている。

與七氏はこれまでの活動を振り返って「酪農家としては昔と変わったことはしていないが、時代が近づいてきた。人との巡り合わせもよかったと思う」と語った。

今後の地域との関係については、「細くてもいいので、関わりを継続していきたい」と

希望を述べた。

小泉牧場のような活動は、都市住民と農業（酪農）とのつながりを強めていくためにも今後とも必要と思われる。引き続き小泉牧場の動向に注目していきたい。

（謝辞）

最後になりましたが、大変お忙しいところ聞き取り調査にご協力頂きました、小泉牧場の小泉與七氏に、この場を借りて御礼申し上げます。

（参考文献・資料）

- ・ J A東京中央会（1996）『江戸・東京 暮らしを支えた動物たち』社団法人農山漁村文化協会
- ・ 結城登美雄（2009）『地元学からの出発—この土地を生きた人びとの声に耳を傾ける』社団法人農山漁村文化協会
- ・ 東京都ウェブサイト
(<http://www.metro.tokyo.jp/> 2012. 5. 17 閲覧)
- ・ 東京都練馬区ウェブサイト
(<http://www.city.nerima.tokyo.jp/> 2012. 5. 17 閲覧)
- ・ 東京都酪農業協同組合ウェブサイト
(<http://www.tokyo-gyunyu.jp/index.html> 2012. 5. 17 閲覧)
- ・ 社団法人中央畜産会ウェブサイト
(<http://jlia.lin.gr.jp/> 2012. 5. 17 閲覧)
- ・ 社団法人中央酪農会議ウェブサイト
(<http://www.dairy.co.jp/newindex.cgi> 2012. 5. 17 閲覧)

16 牧場の様子を至近距離から見学することができる。ただし、衛生面に十分な配慮をしているため、牛舎内の見学や作業体験は、事前に許可を受けた場合にしかできない。